



一人一句

令和二年十一月十日

兼題・当季雑詠

第三一四回・一人一句

能舞台冬の静寂を裂く鼓

昭子

寺の鐘余韻枯野へぬけにけり

訓

就活の先見えぬまま初時雨

敏子

木枯や目醒むれば玻璃震ふ夜半

寿子

紙漉きの歴史にくぼむ槽かねの縁

武

天に我をゆだね漂う浮寝鳥

恵子

セピアいろの母の手確と七五三

里美

冬の日や演歌花道此処にあり

義明

稲いな滓しび火や狼煙のように国界

六斗